テーマ	主体的な選択、自由な愛着の時代へ ―田舎暮らしブームの意味とは？
適用分野	戦後の大衆文化の変遷を背景に、都市・地域・観光の接点として今日的な田舎暮らし・Ｉﾀｰﾝを研究し、人が動くということの意味、交わり混じることの意味を考察する。
研究名称	〈住〉と〈旅〉の変容としての、主体的な地域選択としての田舎暮らし
氏名 所属	菅康弘　教授 文学部　社会学科

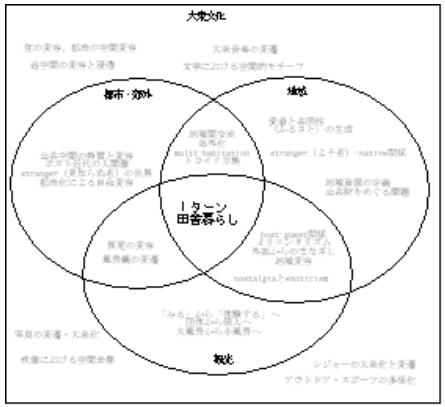
内容

●特徴

田舎暮らしやＩﾀｰﾝに対する一般的な言説は、「人間的暮らし」とか「癒し」といったﾍﾞｸﾄﾙで彩られているが、本研究はそうした言説と異なる方向で、人々が居住地を主体的に選択することとは何か、その結果地域に何がもたらされるか、どのような問題が生じるかを考察している。したがって、「初めに共同性ありき」という一般的ｽﾀﾝｽ（共同体経験→愛着）ではなく、共同性を起点にも終点にも置いて考えるのではなく、土地への愛着や憧憬を中心にすえ、その形成過程において文学や音楽やﾚｼﾞｬｰやｽﾎﾟｰﾂなどの遊領域も視点に入れながら〈住〉や〈旅〉の今日を探っている。

●研究内容

田舎暮らしは「田舎」という言葉を冠しながらも、内実は都市的な部分や観光的なﾓﾁｰﾌが強い〈住〉であり、何より人々が真の意味で〈選択〉する生活領域である。したがって図にあるように、３つの領域からｱﾌﾟﾛｰﾁする必要がある。この意味で、もはや今日「田舎」暮らしという必要はかなり薄くなっており、「〈住〉の選択」という形で広くとらえておく方が、近代からﾎﾟｽﾄ近代への流れを把握するのに生産的である。具体的には、現在観光でも移住でもﾌﾞｰﾑとなっている沖縄を中心的ﾌｨｰﾙﾄﾞに、主体的に‘場所’を選択した人々に取材活動をしており、移住動機の形成過程において‘場所’にどのような愛着が形成されたか、どのような憧れであったか、なぜこの土地かなどを聴き取りし、移住者の心象風景を構成する土地を写真に撮影し、映像と語りの両面から愛着の今日的様態を探っている。また一方で、戦後の大衆文化の変遷が形成した今日的な「場所愛」を探るため、な「場所愛」を探るため、演歌・ﾛｯｸ・ﾌｫｰｸ・J-popなど大衆音楽や文学の中での語り（ふるさと・都市・郊外・流浪・漂泊など）を分析している。



要するに、Ｉﾀｰﾝ移住を起点に都市・郊外・地域・観光、そして大衆文化というﾍﾞｸﾄﾙと、逆に大衆文化（音楽・遊び・文学など）から都市・郊外・地域・観光へ、そして再びＩﾀｰﾝへ、というﾍﾞｸﾄﾙという双方向的な視点から研究を進めている。

キーワード	田舎暮らし、Ｉﾀｰﾝ、ﾄｶｲﾅｶ、移住、地域選択、愛着、憧憬、ｽﾄﾚﾝｼﾞｬｰ、都市、郊外、地域、観光、住、旅、遊び、故郷、ﾉｽﾀﾙｼﾞｱ、ｴｷｿﾞﾃｨｼｽﾞﾑ、風景、視覚、写真、映像、ﾚｼﾞｬｰ、沖縄
連携方法	■ 講演　□ 研修　■ 研究相談　■ 学術調査　■ コメンテート　□ 共同研究